〔原　著〕

「経験のパッチワーク」試論[1]

大畑　裕嗣[2]

要　約

この試論の目的は,「経験のパッチワーク」という社会学的エスノグラフィの新たな方法の輪郭を簡単な適用例とともに示すことにある。「経験のパッチワーク」は,出来事の経験の記述を単に並列したり,完全に綜合したりすることによってではなく,「ぬいあわせる」ことによって,その意味と構造を解明することをめざす。グラウンデッド・セオリー・アプローチとＫＪ法からの含意に基づく本稿の分析手順は次のとおりである。テキスト・データを文単位に切片化し,それぞれの単位にラベルを与え,ラベルをカテゴリー化し,カテゴリーをサブカテゴリーに分割する。データとして,「ノーニュークス・オールスター」(ノーニュークス）と「ロッキンジャパン2017（ロッキン)」に関する学生フィールドワーカーのフィールドノーツを用いる。分析の結果,ノーニュークスとロッキンに共通する8つのカテゴリーと,イベントによるサブカテゴリーの違いが示された。さらに,片方のイベントに固有のカテゴリーも見いだされたが,それはイベントの特性に光を当てるものである。これらのカテゴリーとサブカテゴリーの内容と編成の検討を通じて,フィールドワーカーのイベント経験の意味と構造が明らかになり,新たな研究法としての「経験のパッチワーク」の可能性が示唆される。

キーワード：フィールドワーク,出来事（イベント),経験

1　問題の所在

本稿の目的は,「経験のパッチワーク」という社会学的エスノグラフィの新たな方法の輪郭を,簡単な適用例とともに示すことにある。まず，問題の所在として,「経験社会学」におけるふたつの方法論――人びとからの「出来事」「経験」の報告を「データ」として集める方法と,研究者（集団）自身が出来事の中にはいり，そこで「生きられた経験」を「データ」とする方法――に注意を促す(1)。次に後者の方法の典型であるフィールド

1　本稿は明治大学文学部心理社会学科現代社会学専攻2017年度３年大畑ゼミが行った実習とそれに関するメンバーの論議に多くを負っている。以下のゼミ生一同に謝意を表する（姓のアルファベット順)。紅藤飛雄馬，橋本健吾，池部幸太，井上里穂，小林睦久，森ちひろ，岡崎志保，尾崎南，申昭玲（Shin Soyoeng)，土田智己，山崎堅斗。

2　明治大学文学部心理社会学科　教授

ワークをフィールドワーカー集団が行う場合に要請される分析上の課題を明示し，それに応える方法として「経験のパッチワーク」を示唆する(2)。続いて，本稿で「経験のパッチワーク」に用いるデータ(3)，分析の具体的方法(4)，結果(5)，考察(6)を順次示したうえで，6を敷衍した「経験のパッチワーク」の射程の検討をもって結論に代える(7)。

論議の前提を確認しよう。社会学の研究対象を一般的にどのように規定するかについては，「社会の構造と変動」とか「社会関係」とか，あるいは，よりやわらかい言い方で「人びとのつながり」などと，さまざまな表現がなされる。

ひとまず，このような社会学一般ではなく，「経験社会学」を前提に考えることにする。「経験社会学」という術語は，(「理論社会学」との対比において)「社会調査（特に量的社会調査）を行って仮説を検証する社会学」というような意味で用いられることが多いが，本稿では明治大学文学部（旧）臨床社会学コースが想定した意味での「臨床社会学」，簡潔にその趣旨を述べるならば「実際に社会の現場で調べる社会学」を意味するものとしたい。

そのような「経験社会学」が，具体的な（ある時，あるところの）社会の現場（フィールド）において，直接的に観察し分析しているのは，抽象度の高い概念として示される「社会の構造」（ましてや，その「変動」）などではない。われわれが「社会の現場」に出て，実際に「調べて」いるのは，「社会の中で起こる出来事（event)」ないしは「社会（出来事）の中で人びとがする経験(experience)」である。だとすると，経験社会学のもっとも基本的な問いは，「その出来事はどういう出来事なのか」ないしは「人びとはどのような経験をしているのか[3]」でなければならない。ここから出てくる次の（難しい）問いは，「社会で起こるいろいろな出来事や人びとがする経験と，社会のあいだにどういう関係があるのか」ということになる。さらに本稿では深くは立ち入れないが，重要な，「出来事と経験のあいだの関係はどうなっているのか」という問いが残る。

そもそも「経験」とはなんだろうか。国語辞典は，この語をさまざまに説明しており，辞典ごとの記述の違いは驚くほどである。われわれはこの言葉がもともと哲学用語であったことを忘れて日常的に使っている（例「コンビニでバイトした経験がありますか」）が，この言葉は，日常語に完全になりきれていないもののひとつと言える。プラグマティストたちは，「経験」を個人の「感覚」とそれにもとづく「反省」に還元しようとした古典的経験論を乗り越えるために「行動」という媒介項を導入して，有機体が環境に働きかけてそれを変化させるとともに，自らもその影響を受けるという「能動と受動との密接な結合」(Dewey 1920＝1968：79)を経験としてとらえようとした。またマイケル・オークショット（Oakeshott 1933：9）によれば「「経験」として示される具体的な全体は，分析的には「経験すること」(experiencing）と「経験したこと」(what is experienced）に分かれる。しかし，何かを経験することとそこで経験したことは，分けると意味のない抽象的なものになってしまうので，実際には分けることはできない。（中略）経験したこと

3　ジョン・ロックにとって「経験」は「感覚」(sensation）と「反省」(reflection）に還元され,あらゆる認識を基礎づける,自明で「透明な」ものだった。経験社会学は,これとは逆に「経験の不透明性」を出発点とする。

の性質は，厳密に言えば，それが経験されるやり方（the manner in which it is experienced）と関連している。」

社会学における「調べ」方（調査法）は，まさにオークショットが言う「経験されるやり方」の問題なのだが，「調べ」（「調査」）というのは形式的には自らを「メタ経験」として示そうとする実践である。出来事・経験について調べるということは，ある社会に起こったこと，人びとがなした経験を研究者（調査者）が追体験することとして主張される。

このような意味での出来事・経験の調べ方は，ふたつに大別できる。ひとつは，研究者（またはその集団）が，人びとからの「出来事」「経験」の報告を「（客観的）データ」として受け取り（集め），それを分析するやり方である。このやり方は，社会学のさまざまな研究で広く一般的に用いられてきた。この調べ方には，多数の人びと（厳密には，一定の母集団から体系的なやり方で抽出された標本としての）に標準化されたフォーマットに従って，特定の種類の経験に関する報告を記載（チェック）してもらい，それを回収して数量的にその回答の分布や関連を分析する質問紙調査法，社会的に生産された既存のテキスト（例えばマス・メディアの内容など）をコーディングして分析する内容分析法，あるいは特定のインフォーマントに，問題となっている出来事や経験について話を聞き，その語りを質的に分析する面接法など，さまざまな方法が含まれる。これらの多様な方法に共通するのは，研究者（集団）が「データ」として分析するのは，人びとからの「（原則としては，研究者自身は経験していない，あるいは経験したとしても，それぞれの研究法の公準にてらせば「データセット」に含めるのは適切でない）出来事ないし経験の報告」だということである（図1）。

もうひとつのやり方は，社会学のみならず「科学的」方法論の常道とみなされることの多い上記のやり方に比べると，例外的なものであって，研究者（集団）が起こっている出来事の中にひとまずはいって（自らが出来事の一部になって）それを経験し，そこから出てきてそれを分析するというやり方である。文化人類学でよく用いられる参与観察法や，政策科学で用いられることが多いアクション・リサーチはこのような発想に基づいて行われる。このやり方は，自分は出来事の外にいて人びと（インフォーマント）からその報告を受け取るというものではなく，自らの生身で出来事を経験する，その一部となる，自らが研究者であると同時に参加者として出来事（の一部）を作りあげるというものである。このやり方においては，用いられる「データ」とは，研究者（集団）「自らの生きられた経験」それ自体にほかならない（図2）。

このふたつの調べ方の違いは，一般的に言われる「量的方法論」と「質的方法論」の対比に対応するものでは必ずしもない。最初に挙げた，研究者（集団）が人びとからの「出来事」「経験」の報告を分析する方法は，定量的質問紙調査のように，多数の報告（回答された調査票）を統計的に

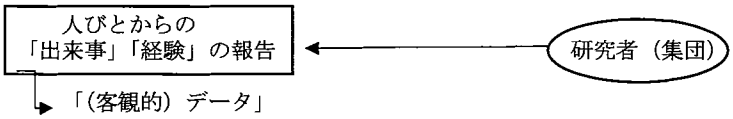

図1　人びとからの「出来事」「経験」の報告を「データ」として集める方法

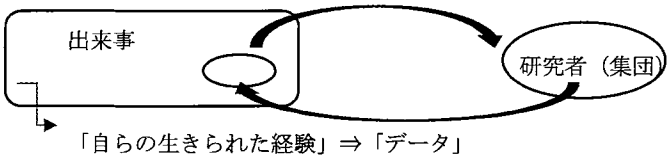

図２　研究者が出来事の中で「生きた」経験を「データ」として用いる方法

合成して，その傾向性を見出そうとする「量的」なものであることもあるし，個別の報告（被調査者の語り）の事例的特徴，特異性に注目する面接法のように「質的」なものであるかもしれない。ここで問題となるのは，得られた結果を処理する方法が「量的」か「質的」かということではなく，研究者（集団）が研究しようとしている出来事とそこにおける人びとの経験に，どのような関わりを持つかという点なのである。

２　フィールドワーク――個人から集団へ

参与観察をともなうフィールドワークは，後者の調べ方の典型と言える。文化人類学や社会学におけるフィールドワークの一般的方法は図３に示したようなものである。個人であるフィールドワーカーは，フィールドにはいっていき，そこで観察，体験したことに関し，まず現場でメモを書く。次に（多くフィールドの中，または周囲にメモを補充，修正しうる場所を見つけて）そのメモをもとにフィールドノーツを書く。最後に（多くフィールドからひとまず出た後に）資料であるフィールドノーツを，考察，分析を含んだ研究成果であるエスノグラフィへと仕上げる。たとえば，トロブリアンドでブロニスロー・マリノウスキーが行い，『西太平洋の遠洋航海者』が書かれた過程，ノースエンドでウィリアム・ホワイトが行い，『ストリートコーナー・ソサエティ』が書かれた過程は，このようなかたちでモデル化しうるであろう。

しかし，フィールドワークにおいてわれわれ（ここでは，2017年度明治大学３年大畑ゼミ）がとった方法は，図４に示すように，共通のフィールド（出来事）に対し，複数のフィールドワーカー（FW）が同時にはいっていく方法だった。それぞれのフィールドワーカーは，フィールドでメモ（M）を書き（書くことを期待され），それをもとに別々のフィールドノーツ（FN）を書く。最後に，すべてのフィールドワーカーのフィールドノーツを，何らかのやり方でつなぎ（ぬい）合わせて，フィールド（出来事）についてのひとつのエスノグラフィ（EG）を作ることをめざした。

このやり方は，プロの研究者が行う共同学術調査などの場合は珍しいことではないだろう。ただ，このプロジェクトは学部３年配当の筆者担当の「現代社会学実習AB」の一環として学部学生によって行われた。このような学部学生のゼミでの実習結果のとりまとめに従来とられてきたやり方をまず検討しておこう。

学部実習で，ある出来事のフィールドワークを行い，その結果を報告書化する場合の（筆者自身もしばしばとってきた）従来のやり方のひとつは，

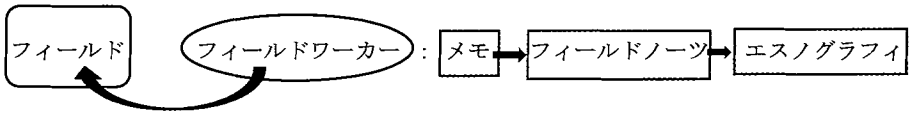

図３　一般的なフィールドワークの方法

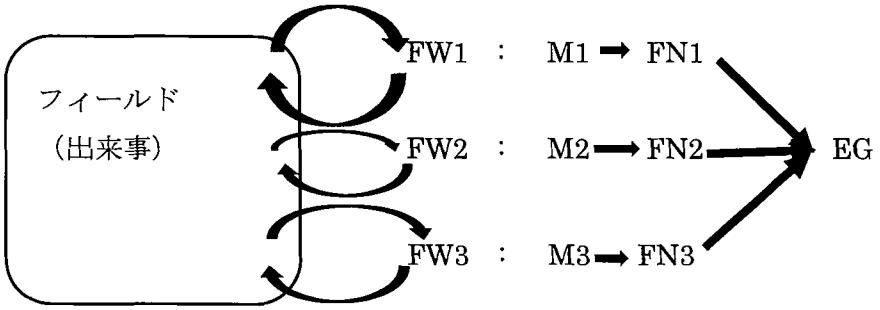

図４　われわれがとったフィールドワークの方法

「並列主義」と呼びうるものである。フィールドワーカー（学生）がそれぞれ別にエスノグラフィを書き，それを，そのまま並べて報告書に収録するかたちを指す。はっきり言えば，高校の修学旅行参加記スタイルだと言える。このような並列主義のテキスト提示の前提にある考え方は，「（同じ出来事の場にいあわせたと言っても）その出来事をどう見るか，それについてどう感じるかは人によってさまざまだ」という，相対主義の考え方と言えよう（図５）。

これに対するもうひとつのやり方の原理は，綜合主義と呼びうるものである。この考え方は，図６で示すように，フィールドワークは，フィールドないし出来事の全体像を示さなければならないということだろう。そのために複数人のフィールドノーツをそれぞれが重複する部分に特に注目してつなぎあわせ，フィールドワークだけでは理解が及ばない出来事の側面については，他の資料を利用して調べた部分を加筆するかたちで，全体としてまとまりのある，ひとつのエスノグラフィに仕上げるものである。綜合主義のやり方の前提にあるのは，「きちんと調べれば，ある出来事の客

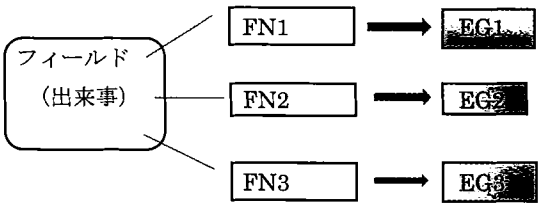

図５　並列主義の考え方

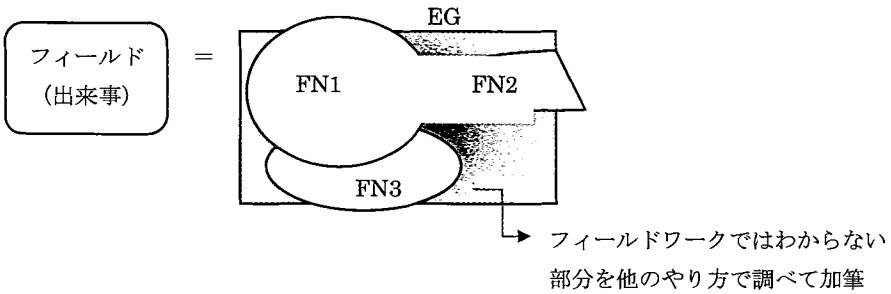

図６　綜合主義の考え方

観的全体像は提示できる」という信念であり，社会事象に関する全体主義（ホーリズム）の考え方に基づいていると言ってもよい。

われわれの立場は，並列主義と綜合主義をともに否定するものである。並列主義と綜合主義の相違は，ある意味，心と社会，個人と社会の問題における古典的アポリアであった心理還元論と社会学主義の対立を反映したものだ。並列主義の考え方を突きつめて行くと，「（各個人が経験した）出来事は各個人の心（脳？）の中にある」，すなわち「出来事それ自体はない」ということになる。これに対し，綜合主義は，「出来事は客観的に一定の全体として存在している」，したがって「十分に調べれば，その全体を（文章として）再現できる」ということになる。

われわれは，出来事や社会的経験は，「部外者」にはまったく接近不能の，その場にいあわせた多数の個々人の「心象」としてのみ存立するものだとは考えない。しかし，同じくまた，それらはその範囲や外縁があらかじめ確定されている「客観的実在」であるとも考えない。本稿が提示する「経験のパッチワーク」とは，「エスノグラフィというかたちで，一緒に経験した出来事をもう一度，ぬいあわせていく」，そうすることで出来事の「意味」を「つかむ」，より大胆に言えば「生みだす」技法なのである。

「経験のパッチワーク」という命名はわれわれの造語であるが，その発想はエスノグラフィという技法の基本的なあり方にすでに含まれている。こども研究者アリソン・クラークは，フィールドワーカーは自らから切り離された「対象」を「手を加えないように」観察，記述する，「見えざる手」や「（宙に浮く）両目」のような存在ではありえないことを指摘する。フィールドワーカーは単なる「記録者」として「そこ」にいるのではない。「エスノグラファー自身が，社会的世界を解釈することを通じて，それを構築している。」（Hammerslay and Atkinson 2007：11）。フィールドワーカーは，調査過程を通して，現場の出来事に参加している人びとと共同で，またその一人として，出来事の意味をつくりだす存在なのである。この自覚は，フィールドワーカーに自らが生産するエスノグラフィの恣意性についてお墨付きを与えるものではない。むしろ逆にフィールドワークの全過程が反省であり，現場においても，そこから離れてなされるエスノグラフィの構築においてもフィールドワーカーは自らの役割への問いと対峙しつづけなければならないことを意味する。

クラークは，エスノグラフィへのこのような認識に基づき，ロンドンのある小学校への幼児学級（nursery class）の統合過程に関する自らの研究でとったアプローチを「モザイク・アプローチ」と呼ぶ。学校での生活空間について，幼児たち，小学生たち，またかれらを支援した実践家たち（クラーク自身を含む），親たち，建築家たちがなした，さまざまな語り，かれらが示したさまざまな資料，プロジェクトの一環として作成されたさまざまな資料をモザイクのようにつなぎ合わせて「今ある空間」「ありうる空間」「新しい空間」「一時的な空間」などの「イメージ」を構築しようとするクラークの調査方法は，本稿で示そうとする「経験のパッチワーク」にきわめて近い（Clark 2010）。

3　データ――２つのイベントに対する学生フィールドワーカーのフィールドノーツ

本稿でデータとして用いるのは，2017年度明治大学文学部心理社会学科現代社会学専攻，筆者担当の「現代社会学実習AB」（３年次配当，以下「３

年大畑ゼミ」と略記）で受講者の実習課題として書かれたフィールドノーツ（以下,「FN」と略記）である。

３年大畑ゼミの実習の全体的概要と本稿の分析の関係は，次のとおりである。３年大畑ゼミは，「フェス」を中心とした，いくつかの大規模な集合的イベントに対して「一般参加者」として参与観察を行うことを目的として，アースガーデン（2017年７月１日（土），代々木公園），オーシャンピープル（2017年７月９日（日），代々木公園），ノーニュークス・オールスター（後述），ロッキンオンジャパン2017（後述），旅祭（2017年９月３日（日），海浜幕張公園），渋谷ハロウィン（2017年10月28日（土），30日（月），31日（火），渋谷駅前スクランブル交差点及びセンター街方面）の現場にゼミ生がグループで赴き，そこでの経験，観察に基づいて各自がFNを執筆した。現地での行動は小グループ単位で行われたこともあるが，FNは行動をともにした小グループでの討論，調整をあらかじめ経たものではなく，フィールドワーカー個人によって書かれている。

筆者は，実習の全過程について指導するとともに，（オーシャンピープルと渋谷ハロウィンの一部日程（28日）を除いて）受講者の現地調査にも同行した。しかし，３年大畑ゼミが行ったフィールドワークの全体的分析は，受講学生自身の解釈と考察に基づいて，別途，執筆，公刊される予定であり，本稿の内容は，３年大畑ゼミにおける報告，討議から多くの示唆と刺激を受けているものの，ゼミによるフィールドワークの全体的な分析結果とは直接の関係はない。本稿では，前述の問題関心に基づき，ゼミで受講者が執筆したFNのうち，ノーニュークス・オールスターに関する３篇のFNとロッキンオンジャパン2017に関する２篇のFNの計５篇のみをデータとして使用する。

分析対象としたイベントのうち，ノーニュークス・オールスター（以下,「ノーニュークス」と略記）は，福島原発事故以降の脱原発運動を代表する運動団体である「首都圏反原発連合」（反原連）が，毎週金曜日に行っている首相官邸前抗議の特別集会として，2017年７月７日（金）18時ころから国会正門前及び首相官邸前で行った集会である（主催者発表で3000名が参加）。３年大畑ゼミは国会前集会を参与観察した（７名の学生が参加）。ロッキンオンジャパン（以下,「ロッキン」と略記）は，2000年以来，毎年８月に茨城県ひたちなか市のひたち海浜公園で行われている，日本を代表するロックフェスティバルのひとつである。2017年は，8月５日（土），6日（日），11日（土），12日（日）の４日にわたって行われ，３年大畑ゼミは６日にゼミ生全員（11名）がフィールドワークを行った。

FNをデータとして使用するにあたっては，（授業の場で）３年大畑ゼミとそれぞれのFN執筆者の了承を得た。ただし，FNを示すにあたっては執筆者と他のゼミ生の名前をすべて任意のイニシャルに変え，誤字，誤記と思われる表記を筆者の判断で訂正するとともに，分析のためにFNの各文ごとに執筆者を示す仮イニシャルを付した通し番号を振った。５篇のFN（ノーニュークスに関するFN１（ａさん），FN２（ｂさん），FN３（ｃさん），ロッキンに関するFN４（ｄさん），FN５（ｅさん））は，本来全篇全文を転載すべきであるが，本稿はデータから分析しうる知見の包括的検討をめざしたものではなく，また紙数の制約もあるため，FN３とFN５のみを示しておく（FN原文のタイトル，FNの日時，場所の記載は削除した。）

<FN3　ノーニュークス，ｃさん>

（ｃ１）金曜日は授業がないので自宅から御茶ノ水に向かう。（ｃ２）やや気温が高く日差しがまぶしい。（ｃ３）17；15，リバティータワー前に集合。（ｃ４）大畑先生が明治Ｔシャツを着ている，背中のプリントがかなり目立つ。（ｃ５）みんなで千代田線に乗って移動。（ｃ６）国会議事堂前につくといきなりデモ参加者と思われる方とすれ違う。（ｃ７）ビラを配る人たちとすれ違う。（ｃ８）移動中なので内容はみれていない。（ｃ９）みな還暦を迎えていると思われる人たちばかり。（ｃ10）反原発のシールを貰う。（ｃ11）一言二言その女性と話したが，内容は覚えていない。（ｃ12）しかしこちらが若いからと言って特段驚いた様子はない。（ｃ13）会場には若い人も居るのだろうかと思う。（ｃ14）ａがビラのおばさんにつかまっているので少し待つ。（ｃ15）途中二人組の僧侶？お坊さんの恰好をしたひと。（ｃ16）何か唱えている。（ｃ17）会場となる国会議事堂前のコーナーに到着。（ｃ18）人は思ったよりまばら。（ｃ19）想像が行き過ぎていたのかもしれない。（ｃ20）高齢の方がどっと集っているのだと思っていた。（ｃ21）すぐに主催者たちが私にビラを渡してきた。（ｃ22）西日がきつくなかなかハードな二時間になりそうだと少し憂鬱にもなる。（ｃ23）私はゼミ生の中で一番右側に陣取る。（ｃ24）隣にはｆ君，反対には40代くらいの男性と60代くらいの女性が２，３人。（ｃ25）そういえば周辺にいる主催者たちのほうが断然平均年齢が低い。（ｃ26）駅周辺にいた人たちは反原連の人とは関係なかったらしい。（ｃ27）デモが始まるとともにいきなりライブパフォーマンス。（ｃ28）インディーズ電力，周囲の人々は見慣れている様子。（ｃ29）やはり常連の人々か。（ｃ30）いきなりライブとは驚き。（ｃ31）主催者の堅いお話ではない。（ｃ32）デモなのにキャッチ―。（ｃ33）むしろ乗り切れていない私たち若いゼミ生が浮いているような不思議な感じ。（ｃ34）遅れて女性が私の隣の女性と合流。（ｃ35）道の途中で警官に通せんぼされたと怒っている。（ｃ36）いやな感じよね～という会話が聞こえる。（ｃ37）おもむろに大きなプラカードを抱えていた袋から取り出す。（ｃ38）原発に対する抗議文，裏にはこんな危険なものを輸出するな（というニュアンス）の言葉。（ｃ39）器用に作ってあるので思わず感心してしまう。（ｃ40）えらい人たちのコメントが続き，やっとコールに入る。（ｃ41）私が想像していたのはこれだ。（ｃ42）しかしどうも生ぬるい感じがする。（ｃ43）自分の勘違いなのか，声をあげてみるが想像より周りは優しい抗議，といった感じを受ける。（ｃ44）日本人がそんなに暴徒化するわけないか，とは思ったがこの場に20代30代が多かったらこんな穏やかではないのだろうなとも思う。（ｃ45）比較対象ではないが，プロ野球の応援が頭をよぎる。（ｃ46）抗議する対象の不透明さもあるのか（安倍総理がいるわけでもないそもそも外遊中，少なくとも私にとっては自民党が憎いわけでもない）そういえばスーツ姿の人々が少ない。（ｃ47）どうしたものかと思ったが時間が早すぎるのか，と思う。（ｃ48）18：45になると人が増えてきた。（ｃ49）後ろを振り返ると長い列ができていた。（ｃ50）アベ政治を許さない，のプラカードを持った少し声を荒げている女性がいる。（ｃ51）あとはどこか警察が暇そうな顔をしている気がしてどこか腹立たしい。（ｃ52）周りを福島原発事故への抗議をする宣伝カー？が通る。（ｃ53）浪江町がどうのこうの，原発一揆とかいてあったがどこの団体かはわからない。（ｃ54）いつの間

にか前の男性がiPhoneで動画を撮影し始め，それをノートパソコンでTwitter に投稿している。（c 55）主催者ではどうもないらしい様子。（c 56）当然高齢の方たちが何かSNSでの拡散を行っている様子もない。（c 57）不思議と目につくのは登壇してくる元東電社員や衆議院議員たちの話に大きくうなずき，ときどきそうだ！のこえを挙げる人々。（c 58）とくに5.60歳くらいの女性。（c 59）かといってコールで人一倍声を上げるわけでもない。（c 60）何か政治に対しての勉強をしに来ているようだ。（c 61）今回のデモはゲストスピーカーも多く勉強会とデモという二面性をもっていて，参加者はどちらかを選択しても，どちらにも参加してもいいといった良い意味のとっつきやすさがあるなと感じた。（c 62）私もその一員だったのかもしれない。（c 63）そのあとは一水会など，登壇する人々のことを手持ちのiPhoneで調べ続けていたのと，キョロキョロ周りを見回すのに必死でデモに取り残された感じがしたので話を聞くのに集中することにする。（c 64）菅直人が登壇する。（c 65）私は菅さんの選挙区に住んでいるので中央線の駅前などでよく演説をする姿を見るので新鮮さはない。（c 66）むしろ私は演説を素通りされている菅さんを何度もみているので，どこかここに登場してくることに違和感すら覚える。（c 67）まわりの参加者も何か苦笑を浮かべている人がいる。（c 68）わたしもその一員だ。（c 69）原発事故当時の首相ということで話に耳を傾ける人と明らかな休憩時間になっている人が見受けられる。（c 70）スーツの参加者はやはりそんなに増えない。（c 71）デモ主催者としても想定内なのであろうか，少し寂しい感じもする。（c 72）ラッパーたちが登場し疲れが溜まってきたので後ろの植え込みに腰をおろしてみる。（c 73）全体的に雰囲気は緩いままだ。（c 74）なぜこんなふうに感じるか考えてみたところ，共謀罪が可決された日のデモの映像をテレビで見たとき，人の数も多くコールが鳴りやまないようなそんな雰囲気であったからだと気づく。（c 75）原発問題で憤っている人たちも確かにたくさんいるのだが，東京に住んでいれば直ちに直接的な影響が出るわけではない，そういったことも影響しているのだろうか。（c 76）原発の問題が風化しているのは事実として認めなければならない一方で声を毎週上げ続けているこの集会の参加者は本当にすごいとそう思う。（c 77）人々のつながりという面ではそういった場面を見たわけではなかったが，この集会そのものが声を上げれない，上げ方がわからない（特に東京の人々は原発がすぐ近くにあるわけではなく，そうなのではないか）の受け皿といった形でつながりを生んでいるという一端を感じ取ることができた気がする。（c 78）解散後，aとあるいていると自転車に乗った女性に話しかけられる。（c 79）「若い人たちお疲れ様，こういうのが大事だからねえらいね。」といった声をかけられる。（c 80）どこかでデモ中に見られていたのであろう。（c 81）すこしうれしい気持ちにもなった。

<FN5 ロッキン，eさん>

（e 1）朝の5時に家を出て，唐木田駅から小田急線に乗って新百合ヶ丘駅で各駅停車から急行に乗り換えた。（e 2）代々木上原駅で降り，東京メトロ千代田線に乗り換えて柏駅で降り，JR特急ときわに乗った。（e 3）電車の中は，私と同じくジャパンロックフェスティバルに行く人たちで混雑していた。（e 4）座席が満席なのはもちろん，通路まで人が立っていて歩くのに苦労し

たほどだった。

（e５）勝田駅に降り立ったちょうどそのとき，チケットを忘れたという重大なミスを犯してしまったことに気付いた。（e６）時刻は既に８時を回っており，自宅に取りに戻ってきたとしても往復で６時間はかかるので取りには戻れない。（e７）とりあえず大畑先生に連絡をして，会場に急ぐことにする。（e８）勝田駅で会ったｉさんと一緒にバスに乗り，会場の日立海浜公園へ向かった。（e９）バスの待機列は非常に混雑しており，バスの中も限界まで人が詰め込まれていた。（e10）今までジャパンロックフェスティバルというものをこのゼミの活動で参加するまで全く知らなかったので，この人気ぶりに少し驚いた。

（e11）会場の入り口にたどり着き，入り口のチケットをチェックする係の人にチケットを忘れたらどこに行けばよいかを聞きに行く。（e12）この時，係の人たちは私がむりやり会場に入るとでも思ったのだろうか，３人で腕を大きく広げて私を制止した。（e13）私にそんな気はないので少しムッとしたが，こんなに大勢の人がいるなら中にはそのような強引な人もいるかもしれないなと思った。（e14）係の人に案内され，会場の入り口の右側にあるインフォメーションセンターらしきテントで受け付けの男性にチケットを忘れた旨を伝えると，紙に名前と住所と電話番号を書くように言われた。（e15）テントの前では既に３，４人の男女がいたのでいずれもチケットを忘れた人たちだろうと思った。（e16）紙を男性に渡した後，その紙を見ながら男性の後ろで座っていた女性がパソコンを操作し始めた。（e17）どうやら，名前，住所，電話番号をチケット購入者リストから検索して本人確認が出来たら，チケット代金を再び払って入場できる仕組みのようだ。（e18）ここで払ったチケットの代金は後日返金されるらしい。（e19）私はチケット代金の13600円を持っていなかったので，待っている間大畑先生から3000円を借りた。（e20）更に20分ほど待つと，パソコンを操作していた女性からリストから私の名前が見つからないということを伝えられた。（e21）これでは入場が出来ないと言われ，ショックを受けたが家にあるチケットの写真を見せれば入場が出来るらしい。（e22）私は急いで母親に連絡して，チケットの写真を取るように頼み込んだ。（e23）チケットを忘れた私に母は大変呆れたようで大きなため息をついていたが，チケットの写真を撮ってラインで送ってきてくれた。（e24）この写真のおかげで，私はやっと会場に入ることが出来たのだった。

（e25）ラインで各々一人か数人でロッキン会場を回ることになったことを聞かされて，私はｉさんとロッキン会場を回ることになった。（e26）私たちは特に目当てのアーティストがいなかったので，とりあえず会場をぐるっと見て回ることにした。（e27）ぞろぞろと道を歩いている人の波を見てみると，一人か数人のグループで参加している人が多いようだ。（e28）そのまま波に沿って進んでいくと，ロッキンの中で一番規模が大きいGrass Stageに行き着いた。（e29）ステージの前方では大勢の人がアーティストの奏でるロックに合わせて，体を揺らしたりタオルを頭上で振り回しているが，後方では点々と人が地面に座って談笑したりスマホをいじっている和やかな風景が対照的だった。（e30）更にその後ろではテントがバラック小屋のように立ち並んでおり，中で昼寝をしている人や食べ物を食べている人をちらほら見かけた。（e31）更に奥へ進んで，森の中のステージに着いた。（e32）ここでは私が好きな

バンドの「女王蜂」があと1時間後に演奏される予定だったので，始まるまでフェス飯を食べながら待つことにした。（e33）買ったおそばを食べながら，ロッキンの客層について観察してみると男女比率は半々で，いずれも20～30代の比較的若い人が多く目についた。（e34）おしゃれに着飾っている人はほとんどおらず，皆バンドのグッズと思われるTシャツを着ていて，首にタオルをぶら下げており，下は短パンというラフな格好が多かった。（e35）フェスでは，日常と違い人からどう見られているかということをあまり意識する必要がないので服装も動きやすさ重視でラフなものになるのかなと私は思った。

（e36）しばらくして「女王蜂」の演奏が始まった。（e37）私も多くのロッキン参加者に習って曲に合わせて体を動かしたり，手拍子をしてみる。（e38）今までフェスやライブというものに参加したことはなかったため，その楽しさというものがいまいちよく分かっていなかったが，こうしてアーティストや大勢の人と一緒になって音楽を楽しむのは一体感があってなかなか面白かった。（e39）このような一体感や，普段の日常とは違い外で体を動かしたり大きな声を出すことが出来る開放感がフェスの魅力なのかもしれない。（e40）また前にアーティストが立って，それに大勢の人々が同調する光景はNo Nukes All Starの国会前のデモに似ていると感じた。

（e41）目当ての曲が終わったので，そこからまた移動することにする。（e42）演奏しているアーティストを横目で見つつ，再びGrass Stageに戻って足を休めることにした。（e43）ついでに，Grass Stage後方に立ち並ぶグッズ売り場も見てみることにする。（e44）やはり売られているグッズで圧倒的に多いのがタオルやTシャツで，逆にそれ以外のグッズはほとんど見られなかった。（e45）周囲の人々もほとんどがこのようなTシャツやタオルを身に着けているので，フェスやライブではお決まりなのかもしれない。

（e46）スケジュールを見るとこの後好きなアーティストが見当たらなかったため帰ろうと思い，入り口付近にあるLake Stageに向かって歩き出すことにした。（e47）Lake Stageまで1kmほどの長い道のりを歩きながら，以前ここの公園でサイクリングしたことを思い出した。（e48）さすがにフェスでは人の量が多いので自転車の貸し出しや通行は出来ないのだろう。（e49）Lake Stageに着いたとき，ちょうど「SCANDAL」が演奏し始めたころだったので少し演奏を聴いてから帰ることにした。（e50）好きな曲の演奏が終わり，iさんと別れ，15時15分に会場を後にした。

4　方法――どのようにパッチワークを行ったか

「経験のパッチワーク」の分析法は，グラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA）（特に，その創始者のひとりである，バーニー・グレーザーが提唱する「古典的」なバージョン）とKJ法の双方から，大きな示唆と影響を受けている。

ただし，GTAが（発展の中で生じたさまざまなバージョン（Glaser and Strauss 1967＝1996）（Strauss 1987）（Glaser 1992）（Charmaz 2014）（木下 2003）の間に存在する大きな違いにもかかわらず）データから「理論」を生成するという共通の志向性を有しているのに対し，「経験のパッチワーク」は，経験の記述（本稿の場合，FN）を分析することで，なんらかの意味で個別的な経験を「超える」「普遍性の高い」「理論」を生みだそうとするものではない。「経験のパッチワーク」がめざすのは，前述の通り，複数のフィールドワー

カーが同じ場で得た経験を「ぬいあわせる」ことで，その経験の意味と構造を理解することであり，そのためにGTAの手順と，その展開の中で開発された（一部の）ツールを（かなりゆるやかなかたちで）転用していると言える。

KJ法については，それが野外（フィールド）における人間行動の観察をまとめあげる（川喜田1967，1973）という必要性から生まれた技法であるがために，「経験のパッチワーク」との距離は，GTAよりもさらに近い。正直に言って，筆者としては，「経験のパッチワーク」というのは，要するに，ゼミのフィールドワークデータの整理にKJ法を使うことだというように解されても，あまり異議はない。ただもし，川喜田二郎（1973）がめざした「異質なデータの綜合的まとめ」で言う「綜合」ないし「統合」が，2で述べたような「綜合主義」に後退するものなのだとしたら，われわれのめざすところはそこでもない。

本稿における具体的な分析手順は，(1)（3ですでに示したように）FN1～5をそれぞれ文ごとに切片化して，(2)文ごとに内容を示すラベルを付し，(3)記述されているイベントごとに（言いかえれば，FN1～3とFN4，5とに分けて，それぞれ別々に）ラベルを意味的に統合してカテゴリーを生成し，(4)生成したカテゴリーを，同じイベントの他のカテゴリー及びイベント相互（ノーニュークスとロッキン）間における同一のカテゴリーとの比較検討に基づき，サブカテゴリーに分割する，というかたちをとった。このコード化作業により，FN1～5を構成する計301個の文は，いずれも，どれかひとつのカテゴリーに帰属されるという結果に至った。

本稿の目的は，分析の結果の詳細な検討ではなく，方法論の例示にあり，加えて紙数の制約もあるため，5つのFNすべてのコーディング結果ではなく，FN3についてのみ文番号順に，文ラベルとカテゴリー（略号のみ，内容は5で示す）の対応関係を示しておく（表1参照）。

表1　FN3 文ラベルとカテゴリー

文番号	ラベル	カテゴリー
c 1	集合場所へ移動	AC
c 2	天気	ES
c 3	集合	AC
c 4	教員のフアッション	PE
c 5	目的地へ移動	AC
c 6	デモ参加者	PE
c 7	ビラを配る人々	PE
c 8	ビラの内容見られず	TI
c 9	参加者の年齢層	PE
c 10	反原発のシールを貰う	IA
c 11	参加者との会話	IA
c 12	自分たちが若いことへの驚き感じられず	IT
c 13	若い人もいるのか？疑問	IT
c 14	a，ビラのおばさんにつかまる	IA
c 15	僧侶姿の参加者	PE
c 16	僧侶姿の参加者，何かを唱える	PE
c 17	会場への到着	AC
c 18	思ったよりも人はまばら	ES
c 19	デモに対する想像との食い違い	IT
c 20	予想したイメージ	IT
c 21	主催者からビラを渡される	IA
c 22	西日がきつく憂鬱	ES
c 23	ゼミ生の中での位置取り	AS
c 24	周囲の人びと	PE
c 25	主催者は参加者よりも年齢が低い	PE
c 26	駅周辺にいた人びとは反原連とは無関係	PE
c 27	開始早々，ライブ	ES
c 28	インディーズ電力に対する人びとの対応	IA
c 29	常連の人々	IT
c 30	いきなりライブが始まって驚く	IT
c 31	主催者の堅い話ではない	IT
c 32	キャッチ―	FE
c 33	乗り切れていない自分たちが浮いている	IT
c 34	合流する参加者	IA
c 35	参加者間の会話	IA
c 36	参加者間の会話	IA
c 37	プラカードのとり出し	IA
c 38	プラカードの内容	TI
c 39	プラカードへの感心	FE
c 40	コメントからコール	ES
c 41	（コール）想像していたもの	IT
c 42	生ぬるい感じ	MO
c 43	想像していたものとのずれ→優しい抗議	IT
c 44	日本人/高齢者だから穏やか	IT
c 45	プロ野球の応援の連想	IT
c 46	抗議する対象が不明確，スーツ姿に人の少なさ	MO

c 47	解釈，時間の早さ	IT
c 48	人の増加	ES
c 49	後方に長い列	ES
c 50	少し声を荒げている女性	AC
c 51	ひまそうな警官，腹立たしい	PE
c 52	福島原発に抗議する宣伝カー	OS
c 53	宣伝カーの団体不明	OS
c 54	動画撮影，投稿	AC
c 55	投稿者は主催者ではないらしい	AC
c 56	高齢者が拡散を行うようすなし	AC
c 57	スピーチにうなずき「そうだ！」の声をあげる人びと	IA
c 58	めだった50,60歳ぐらいの女性	PE
c 59	コールで人一倍声をあげるわけではない	AC
c 60	印象：政治に対しての勉強	IT
c 61	勉強会とデモという二面	IT
c 62	自分の参加が許容されたメカニズム	IT
c 63	調べること，見回すことでデモに取り残される→聞くことに集中	IT
c 64	菅直人登壇	PE
c 65	菅直人，同じ選挙区なので新鮮さなし	IT
c 66	菅直人の登場への違和感	FE
c 67	参加者の菅直人への苦笑	IA
c 68	私の菅直人への苦笑	IA
c 69	菅直人に対する聴衆の態度二分	MO
c 70	スーツの参加者増えず	ES
c 71	スーツの参加者が増えないのは想定内か，さびしい感じ	FE
c 72	ラッパーの登場，疲れ，植え込みに腰をおろす	AC
c 73	全体的にゆるい雰囲気	MO
c 74	共謀罪法案可決の日のテレビ画像との比較	IT
c 75	東京は原発の直接的な被害なし，ゆるさの解釈	IT
c 76	原発問題の風化→声をあげつづけている参加者のすごさ	IT
c 77	声をあげられない，あげかたがわからない人びとに受け皿	IT
c 78	解散後，参加者に話しかけられる	IA
c 79	「若い人たちお疲れさま」	IA
c 80	自分たちが見られる	IT
c 81	声をかけられ，少しうれしい	FE

5　結果――フィールドノーツから見いだされたカテゴリー／サブカテゴリーによるパッチワーク

分析の結果，ノーニュークスのFN（FN１～３）とロッキンのFN（FN４，５）に共通に見いだされる，次の８つのカテゴリーが得られた。(1)イベントの継起的―空間的構造と外的規定要因（Event Structure，以下ES），(2)人びと（Person，以下PE），(3)モノ／情報（Thing/Information，以下TI），(4)自分（たち）や他者の行為（Action，以下AC），(5)相互行為（Interaction，以下IA），(6)解釈（Interpretation，以下IT），(7)感じ（Feeling，以下FE），(8)雰囲気（Mood，以下MO）。さらにノーニュークスのFN（FN１，３）にみられてロッキンのFN（FN４，５）にみられないカテゴリーとして「外部」（Outside，以下OS）が，逆にロッキンのFN（FN４，５）にみられてノーニュークスのFN（FN１～３）にみられないカテゴリーとして「エピソード」（Episode，以下EP）が得られた。表２は，これら10個のカテゴリーと各FNの文ラベルとの関連を示したものである。

片方のイベントのFNにしか見られないOSとEPについては，章末で検討することとし，共通にみられる８つのカテゴリーについて（紙数の制約により，ごく概括的に）述べる。ESは，イベントの継起的展開（順序等）とその空間的構造（人びとの集まりを含む），およびそれに影響を与える外的要因（ノーニュークスのFN３において天気に言及されている）の記述である。PEは，「自分（たち）」（フィールドワーカーのチーム＝ゼミ）を含む，イベントの場に居あわせる，さまざまな人びとのカテゴリーを記述したものである。TIは，学生フィールドワーカーが特に注目したモノや情報（のメディア）の記述である。ノーニュークスの場合，集会参加者が作成した意思表示のためのアイテム，配布されるビラやそこに書かれた情報，ロッキンの場合，ファッションや販売されているグッズに言及されている。ACは，「自分（たち）」や他のサブカテゴリーの人びとが行う行為の記述である。記述がある特定の行為者の選択，

表2　個人別　文ーカテゴリー

	Event Structure (ES)	Person (PE)	Thing/ Information (TI)	Action (AC)
a	13,27,35, 43 4 (9)	2,4,5,6,10, 11,12,14, 25,28,29, 40,41 13 (28)	18 1 (2)	1,3,7,22,23,24,32,33,34,36 10 (21)
b	5,6,10,11, 15,34 6 (17)	2,3,4,12, 13,17,18, 19,35 9 (26)		1,14,16, 3 (9)
c	2,18,22, 27,40, 48,49,70 8 (10)	4,6,7,9,15, 16,24,25, 26,51,58, 64 12 (15)	8,38 2 (2)	1,3,5,17,23,50,54,55,56, 59,72 11 (14)
NN 計	18 (11)	34 (21)	3 (2)	24 (15)
d	13,17,37, 38,39,43, 50,53,54, 58,71,78,81 13 (15)	6,25,41,55, 56 5 (6)	9,10,64 3 (3)	1,2,4,5,8,12,1418,19,20, 23,24,34,35,36,42,45,46, 49,52,57,59,72,73,74,75, 76,77,79,80,88 31 (35)
e	4,9,43 3 (6)	3,27,33 3 (6)	34,44 2 (4)	1,2,8,26,28,30,31,32,36, 37,41,42,46,49,50 15 (30)
RI 計	16 (12)	8 (6)	5 (4)	46 (33)

動作に注目してなされており，他の人びととの行為連関に明示的な言及がなされていないという点において，次のIAと区別した。これに対し，IAは，ある特定のサブカテゴリーのPEどうし，あるいはサブカテゴリーを異にするPE間に行われる相互行為の記述である。ITは，以上のような観察，経験に基づき，フィールドワーカーによって行われるイベントあるいはイベント経験の，全体的あるいは局所的諸相の意味解釈の記述である。ITは，多様な（そして複雑な連関を有する）サブカテゴリーに分化する。データの分析により，ITとは別のカテゴリーとしてFEやMOを設定することの妥当性が示唆された。日常的表現に近づけて述べれば，ITが総じて「行われているのは何（だと思う）か」の記述であるのに対し，FEは「行われていることに対して（自分は）どう感じたか」，MOは「それが行われている場の雰囲気はどうだったか」の記述である。FEの例としては，ノーニュークスに関する「デモなのにキャッチ―」（c 32），ロッキンに関する「私はたまたまそのライ

※ゴシック数字は，文の個数。括弧内は各人の全文数に対するパーセント

Interaction (IA)	Interpretation (IT)	Feeling (FE)	Mood (MO)	Outside (OS)	Episode (EP)
9,21,26,30,38, 39 6 (13)	8,15,31,37,42, 44,45,46,47 9 (20)	16 1 (2)	17 1 (2)	19,20 2 (4)	
7,21,22,23,24,25, 2627,28,29,30,31, 32, 33 14 (40)	8,9,20 3 (9)				
10,11,14,21,28,34, 35,36, 37,57,67,68, 78,79 14 (17)	12,13,19,20,29, 30,31,33,41, 43,44,45,47,60, 61,62,63,65, 74,75,76,77,80 23 (28)	32,39, 66,71, 81 5 (6)	42,46, 69,73 4 (5)	52,53 2 (2)	
34 (21)	35 (21)	6 (4)	5 (3)	4 (2)	0 (0)
3,7,16,22,61,62 6 (7)	15,21,29,31,32 33,44,51 8 (9)	11,30, 40,60 4 (5)	26,27, 28,47, 48,63 6 (7)		65,66,67,68, 69,70,82,83, 84,85,86,87 12 (14)
25 1 (2)	10,35,39,40,45, 47,48 7 (14)		29,38 2 (4)		5,6,7, 11,12, 13,14, 15,16 17,18, 19,20, 21,22, 23,24 17 (34)
7 (5)	15 (11)	4 (3)	8 (6)	0 (0)	29 (21)

ブを見たが，いつの間にかファンになっていた」（d30）などを，MOの例としては，ノーニュークスに関する「周りの参加者を観察していると意外にも服装に統一性はなく何かしらの主張や抗議の言葉が書いてあってもその種類は違うものが多かった」（a17→ラベル「参加者の統一性のなさ」），ロッキンに関する「ステージの前方では大勢の人がアーティストの奏でるロックに合わせて，体を揺らしたりタオルを頭上で振り回しているが，後方では点々と人が地面に座って談笑したりスマホをいじっている和やかな風景が対照的だった」（e29→ラベル「ステージの前方と後方での雰囲気の違い」）などを，それぞれ挙げることができる。

これらの見いだされたカテゴリーに依拠して，a，b，cのノーニュークス経験を，またdとeのロッキン経験をどのようにパッチワークすることができるか。ESからMOまでの8つのカテゴリーは，両方のイベントに共通に見いだされたとはいえ，表2の「NN計」と「RI計」の行に示したように，各カテゴリーに属するラベル数の構成

比は，ふたつのイベントで異なっている。ノーニュークスは，ロッキンに比べ，PE，IA，ITなどの構成比が高くなっているのに対し，ロッキンはノーニュークスに比べ，ACの構成比が高くなっている。言いかえれば，学生フィールドワーカーは，ノーニュークスではロッキンに比べ（自分たちを含む）「人びと」と他の「人びと」のあいだの「相互行為」により注目し，イベントの意味についてより多くの「解釈」を行ったのに対し，ロッキンにおいては学生フィールドワーカーの関心は人びと（その相当の部分は自分たち自身）が行う個別の「行為」に向けられたということである。

このようなノーニュークスとロッキンの経験の構造の違いは，両イベントにみられるカテゴリーをサブカテゴリーに分割してみるとより明らかになる（表3参照）。表3は，紙数の制約のため，見出されたすべてのサブカテゴリーとその間の関連を記したものではなく，簡略化してあるが，表に記した範囲で述べると，ノーニュークスのESは，（単一の）「ステージ」において行われるイベントの継起的進行と，それに呼応して国会前という場所において人びとが作りだす空間的分化という二次元で比較的単純に記述されている。これに比べ，ロッキンのESはより複雑である。空間構成としては，複数のステージとそれ以外の「施設」，さらにそれらのあいだに生まれる「空間」と，それらの場所を媒介する野外演奏というメディアにより，会場全体としての境界のなさが，それに注意を集中していたわけではないフィールドワーカーによってもとらえられ，経験として記述される（d71「グッズ売り場のところは人が少なくて，少し先にGRASS STAGEがあったがそこからの大きな喊声が聞こえた」）[4]。このような空間構造に規定されつつ，ロッキン経験の継起構造は，ノーニュークスにおけるそれのように一次元的には記述しえない。各ステージにおいて進行している個別の継起と，ステージ間を移動している自らの行為（AC）との「同期」として記述せざるをえないのである。

しかし，このようなESの対比とは対照的に，ノーニュークスにおいては，自分，自分たち（フィールドワーカーのチーム＝ゼミ），「参加者」と「主催者」（イベントを運営する反原連関係者）の分化，加えて，イベントの場にいる「非参加者」（国会前の歩道を通行する人びと），警察という，多様なPEのカテゴリーが提示されたうえで，それらの多様なPEにおける，あるいはPE間の相互行為が描かれている。そのような観察と経験の記述に基づき，（狭義の）解釈，イベントに関する（事前の）予想，予想と現実の経験とのずれ，驚き，さまざまな経験間の比較，それらに基づくフィールドワーカーの（一種の）自己省察など，「ノーニュークスとは何か」，さらに「ここにいる私たちとは誰か」に関する多層的なITが導かれている。これに対して，ロッキンにおいては，PEは「自分たち」「アーティスト」「参加者」という3つの単純なサブカテゴリーに依拠して把握され，IAは「自分たち」のあいだと，「（自分たち以外の）参加者」のあいだにおいて，それぞれ別個に記述されるのみであり，前述の複雑なESに対応する自/他のACが強調，記述されている。それに基づいて，主として「ロッキンの楽しさ，魅力」に焦点をしぼった「集約的な」IT，イベントの意味解釈が導かれる。

4　ノーニュークスとロッキンとでは「ステージ」の数が異なるだけではなく，その概念内容自体が異なっていると思われるが，本稿ではこの点については立ち入ることができない。

表3　NNとRIのカテゴリーとサブカテゴリーの関連（抜粋）

カテゴリー＼イベント	ノーニュークス		ロッキン		
ES	外的規定要因	天気			
	継起的	イベントの進行、区切り（順序）	継起的	イベントの進行と自らの行為（AC）の同期⇒イベントの進行への割り込み	
	空間的	空間構成	空間的	会場の境界のなさ	
		人の集合状態		施設	（複数の）ステージ
					それ以外
				「空間」	
PE	自分（たち）		自分（たち）		
	参加者 ⟷ 主催者		参加者		
	「ステージ」の人びと		アーティスト		
	その場の「非参加者」（通行人）				
	警察				
IA	参加者―自分たち	「インタビュー」			
		（自然状況の）会話			
	参加者間		参加者間		
	ステージ－参加者				
	主催者－警察				
			自分たちの間		
IT	（狭義の）解釈		（狭義の）解釈	イベント全般	人気、魅力
					雰囲気、つながり
				行為の規範	
				特定アーティストの有名性、人気	
	予想 →	予想とのずれ			
	驚き				
	比較		比較		
	自己省察				
	特殊なシークエンス				

最後に，片方のイベント経験にだけみられるカテゴリーの内容について検討する。ノーニュークスにおけるイベントの外部（OS）としては，具体的には，会場である国会正門前に接した車道を走行する自動車が描かれている。ひとつはイベントの「半外部」とも言える福島原発事故に抗議する「宣伝カー」（「どこの団体かはわからない」）（c 52，53）であり，もうひとつはイベントの完全な「外部」，観光バスに乗って車道を走行しつつ，一瞬，歩道上で行われている「日本のデモ」に目を留めつつも，ただちに反対側の国会議事堂にまなざしを移す「外国人観光客」（a 19，20）である。

ロッキンのFNには，このような意味での「半外部」ないし「外部」は描かれていない。

ロッキンのFNには，フィールドワーカー自身や他のサブカテゴリーのPEのAC, IA, またそれに対するITなどのシークエンスとして描かれる，複数の文からなるストーリーであるEPという記述のカテゴリーが見いだされる。dにおいてはd65～70の「水」（会場の暑さの中，かわきを覚えたdが自販機で水を買おうとした際の苦労話）とd82～87の「サークル」（Mongol800のライブで目撃した，オーディエンスが円形になりお互いの身体をぶつけあうパフォーマンス）が，eにおいてはFNの文全体の34％を占める（会場入場前の）e5～7，11～24の「チケット忘れ」経験が描かれる。ノーニュークスのFNにおいてはこれらと比べることができるEPは認められない。

6　考察――2つのイベント経験のパッチワークを対比して

ノーニュークスとロッキンの複数の学生フィールドワーカーによるFNを「経験のパッチワーク」の方法で分析すると，両方のイベント経験に共通するカテゴリーとともに，片方のイベント経験に固有のカテゴリーも見いだされた。また共通するカテゴリーについても，イベントによって，サブカテゴリーの種類と編成は異なることが見いだされた。これらの知見から，「経験のパッチワーク」は，複数のフィールドワーカーによるデータを「ぬいあわせ」，個別の報告からはみえにくい出来事の経験の構造を明らかにするうえで一定の有効性を有していることが示唆された。

OSというカテゴリーが，ノーニュークス経験のFNから導出されたにもかかわらず，ロッキン経験のFNからは導出されなかったのは，なぜだろうか。ロッキンは，車道という「外部」に面した国会前の歩道とは異なり，ひたち海浜公園という「外部」から明確な境界をもって隔てられた場所で行われているから，というのは必ずしも十分な説明とはなるまい。遊園地であるひたち海浜公園はロッキン当日も開園しており，公園内には遊園地への来園者たちがあふれる。なるほど，ロッキンのチケットと交換にわたされるリストバンドをつけていない「一般」の来園者たちは，ロッキンが行われているエリアには立ちいることができない。しかし，ロッキン「参加者」のほうは，ロッキンが行われているエリアも遊園地としての空間も往来自由であり，ロッキンに参加しつつ，「ロッキンに来た以外の人びと」と出会うことも可能なのだ。遊園地に来た人びとは，ノーニュークスのほうでいうと「外部」ないし「半外部」というよりも，PEのサブカテゴリーとして挙げられた「その場の「非参加者」，通行人に近い存在なのかもしれない。しかし，いずれにせよ，dとeのFNには「ロッキンに来た以外の公園来園者」の姿や，「その人たちはロッキン，ロッキン参加者をどうみているか」といったことは記述されていない。ロッキンの「外部」が描かれないのは，物理的な空間構造のみに関わることではなく，「外部」を消去し，隠ぺいするロッキンの意味構造にも関わることとして解釈できるのではなかろうか。ちょうどディズニーランド（経験）の「外部」が描かれることがないように。

EPというカテゴリーが，ロッキン経験のFNから導出されたにもかかわらず，ノーニュークス経験のFNからは導出されなかったのは，なぜだろうか。フィールドワーカーがフィールドに滞在した時間の長短（ロッキンのほうがノーニュークスより長い）に単純に帰すことができることではあ

るまい。3年大畑ゼミの学生フィールドワーカーにとって，ノーニュークスは，さまざまな「解釈」を誘発する「未知」のイベントではあっても，そこでの経験からストーリー性をもった「エピソード」を切りだすことができるイベントではなかった（鯨岡 2005）。それに対して，ロッキンはそれをなしうるイベントだったということになろう。eに「チケット忘れ」を，dに「水」と「サークル」を「語らせ」えた，ロッキン経験の本質とは何だったのか。このように，「経験のパッチワーク」は，異なる経験をぬいあわせることによって，ぬいあわせたパッチワーク相互の比較を促し，出来事の経験に関する新たな問いを明細化する試みなのである。

7　結論——パッチワークの射程

「経験のパッチワーク」は，どのようにして可能になったのか。FN，すなわち「書かれた経験」を文単位に切片化し，切片にラベルを付し，ラベルをカテゴリー化し，カテゴリーにサブカテゴリーを見いだすことによって，つまり，「分ける」ことによってである。複数の人たちの経験は，「分けられる」ことによって「つなぎあわされ」，共通に経験した出来事の意味を明らかにするものとなったのである。筆者はかつて，現代社会における社会運動の可能性を論じるという文脈において，ケビン・マクドナルド（McDonald 2002）の論議に依拠しつつ，「自己と他者に関わる公的な経験の重要性」に言及したことがある（大畑 2004：177-178）。「経験のパッチワーク」は，現代社会における「自己と他者に関わる公的な経験」の意義を解明するための，ひとつの方法論となりうるかもしれない。

本稿が例示したように，パッチワークによって，異なるイベント経験間の比較考察が可能となったわけだが，パッチワークの方法が2で述べた「並列主義」とも「綜合主義」とも異なる発想に基づくものであることも，同様に本稿の例示を通じて明らかになったかと思う。

並列主義は，個人の経験の他者のそれへの還元不能性を重視するため，本稿で用いたFN1～5のようなFNは，並列的に提示されるのみである。それでは，その集団におけるイベント経験の意味は，はっきりとは見えてこない。この点に関し，パッチワークによる経験の再構成は，もともとのFNで語られていた経験のある側面，「生き生きした，ゆたかな」側面を，むしろ切り捨ててしまうことになるという批判がありうることは承知している。より具体的には，文単位の切片化は，FNが有していた各文間のシークエンス，文脈を破壊してしまっているのではないかという疑義となろう。このような批判に対しては，当面，次の2点から応えうると思う。第1に，本稿の分析は，ゼミ生のFNをデータとしてフィールド経験を共有した教員が行ったわけであるが，本来，ラベル付け→カテゴリー化→サブカテゴリーへの分割という一連の過程は，フィールドワーカーである学生自身によって，相互討論に基づく，自分たちの経験の追体験としてなされるのがより望ましく，そのように集団的フィールドワークの過程により有機的に組みこまれたやり方でパッチワークを行えば，この問題点は，ある程度，克服されるのではないか。第2に，本稿ではその段階まで分析を進めることはできなかったが，FNの文ラベル間のシークエンス（文脈）と，カテゴリー－サブカテゴリーの関連を考慮したパッチワークを行うことは可能であり，今後の課題のひとつとなる。

綜合主義に基づけば，分析の帰結として導出さ

れるべきは，イベントの客観的な全体構造，あるいは（グラウンデッド・セオリー・アプローチのある種のバージョンが想定するような）客観的社会現象の理解に立脚した，同類型の現象に一般化可能な「理論」でなければなるまい。「経験のパッチワーク」がめざすのはそのようなものではない。破れ目があるかもしれないが，個人の経験の語りよりは，あるイベントに関する広く深い視野を与えてくれるような，共通のイベント経験のぬいあわせ。われわれが「経験のパッチワーク」に求めるのは，それ以上でも，それ以下でもない。

主流派社会学は，その基本的分析概念のひとつとして長く「出来事」を欠いてきた。既存の社会理論の中で「出来事」はまだ適切な位置づけを得られないでいると言っても過言ではあるまい[5]。社会学に対して，「経験のパッチワーク」が提出するのは，次のような，「問い」とみなされなかったような「問い」である。ある（社会的な）出来事を（経験と観察に基づいて）記述したとする。そうすると，その記述は，いくつかの異なった種類（カテゴリー）の内容に分かれる。カテゴリーの分かれ方は，出来事ごとに異なってくるようにも見えるが，この分化のしかたは実際にどのようにして決まってくるのか。

「解釈は歴史的・社会的事象をとらえるのに必要な手段であるが，個人の体験をこえて独立に存在する客観的連関をとらえることはできない」(筆者不明 1979：29）という言い古されてはいるが，無視することはできない警告をも引きうけつつ，上の問いと向かいあっていくこと。その周辺に，まだ初歩的で洗練されていない技法である「経験のパッチワーク」の可能性はあるのかもしれない。

文献

Abbott, Andrew, 2016, *Processual Sociology*, University of Chicago Press.

Charmaz, Kathy, 2014, *Constructing Grounded Theory*, 2d. ed., Sage.

Clark, Alison, 2010, *Transforming Children's Spaces：Children's and Adults' Participation in Designing Learning Environments*, Routledge.

Dewey, John, 1920, *Reconstruction in Philosophy*, Henry Holt.（＝1968, 清水幾太郎・清水禮子訳『哲学の改造』岩波書店.）

Glaser, Barney J., 1992, *Basics of Grounded Theory Analysis*, Sociology Press.

Glaser, Barney J., and Anselm L. Strauss, 1967, *The Discovery of Grounded Theory：Strategies for Qualitative Research*, Aldine De Gruyter.（＝後藤隆他訳『データ対話型理論の発見――調査からいかに理論をうみだすか』新曜社.）

Hammersley, Martyn, and Paul Atkinson, 2007, *Ethnography：Principles in Practice*, 3d. ed., Routledge.

川喜田二郎, 1967,『発想法』中央公論社.

――, 1973,『野外科学の方法』中央公論社.

木下康仁, 2003,『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践』弘文堂.

鯨岡峻, 2005,『エピソード記述入門――実践と質的研究のために』東京大学出版会.

Long, Norman, and Ann Long, eds., 1992, *Battlefields of Knowledge：The Interlocking of Theory and Practice in Social Research and Development*, Routledge.

McDonald, Kevin, 2002, "From Solidarity to Fluidarity:

5　その中でアクター・オリエンテッド・アプローチ（Long and Long 1992）や過程的社会学（processual sociology）（Abbott 2016）は,本稿と類似した問題関心に立脚した理論的・方法論的試みと言える。

Social Movements Beyond "Collective Identity"— the Case of Globalization Conflicts", *Social Movement Studies*, 1(2)：109-128.

Oakeshot, Michael, 1933, *Experience and Its Modes*, Cambridge University Press.

大畑裕嗣, 2004,「モダニティの変容と社会運動」曽良中清司他編『社会運動という公共空間——理論と方法のフロンティア』成文堂, 156-189.

Strauss, Anselm L., 1987, *Qualitative Analysis for Social Scientists*, Cambridge University Press.

(筆者不明), 1979,「解釈」粟田賢三・古在由重編『岩波哲学小辞典』岩波書店, 29.

An Essay on "Patchwork of Experiences"

Hiroshi OHATA

ABSTRACT

The purpose of this essay is to give an outline of a new method in sociological ethnography named "patchwork of experiences" with its brief application example.The "patchwork of experiences" aims to clarify the meaning and structure of event experiences by "stitching up" their descriptions , not by their simple standing in a row or complete synthesis. The analytic procedure in this essay to depend on the implication from the grounded theory approach and KJ method is as follows: Slicing text data into sentence units, giving a label to each unit, categorizing labels, and dividing a category into sub-categories. The undergraduate fieldworkers' fieldnotes on "No Nukes All Star"(No Nukes) and "Rock in Japan 2017"(Rock In) are used as data. The result of analysis reveals eight categories common to No Nukes and Rock In, and the difference in sub-categories between these events. Moreover, categories peculiar to one event only are found, which shed light on the characteristics of the events. Through the examination of the content and formation of these categories and sub-categories, the meaning and structure of fieldworkers' event experiences come to make clear, suggesting the potential of "patchwork of experiences" as a new research method.

Keywords: Fieldwork, Event, Experience